

平成 16 年度

I 国 語

( 9 時 00 分 ~ 9 時 50 分 )

注 意

- 問題用紙は 3 枚 ( 3 ページ ) あります。
- 解答用紙はこの用紙の裏面です。
- 答えはすべて、解答用紙の所定の欄に、文、文字などで答えるもののほかは、ア、イ、……などの符号で記入しなさい。
- 解答用紙の※印の欄には記入してはいけません。

注意

字数指定のある問題の解答については、句読点も字数に含めること。

1 次の1、2の問いに答えなさい。

1 次の各文中の——線をつけたカタカナの部分、漢字に直して書きなさい。

- (1) 先生に貴重品をアズける。
- (2) 学級会の司会をツトめる。
- (3) セイケツな服装を心がける。
- (4) 私の姉は、カンゴ師として小児科で働いている。

2 次の会話の——線をつけた語を、Aは尊敬語、Bは謙譲語に書き直さない。ただし、「言う」という語は使わないこと。

先生 「今度の家庭訪問の日程について、おうちの方は何と言っていましたか。」

生徒 『あの日程で結構です。』と言っていました。

11 次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

A まさをなる空よりしだれざくらかな

B 菜の花の地平や父の肩車

C かたまつて薄き光の董かな

D つきぬけて天上の紺雲珠沙華

E 冬菊のまとふはおのがひかりのみ

F 白牡丹といふといへども紅ほのか

注1 真つ青な。 注2 「ひがはんば」の別称。  
注3 おのれ。

1 一面に広がる美しい花の情景が、幼いころの体験とともに詠まれている句をA〜Fの中から一つ選びなさい。

2 まっすぐに伸びる花の様子を鮮やかな色彩の対比とともに、体言止めを用いて表現した句をA〜Fの中から一つ選びなさい。

3 次の文章は、A〜Fの中のある句の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

人は花を見るときに、美しさや可憐さに心をときめかせるばかりでなく、その花に自らの思いを託して見ることがあるものです。作者には、この花が、厳しい季節のなごい日ざしの中で、外から受ける光ではなく、自らの放つ光に包まれ輝いているように見えたというのです。そのことを、「光を」I」という擬人法を用いて表しています。作者は、この花の姿に、II」という自分自身の思いを重ね合わせたのです。

(1) この鑑賞文のIにあてはまる最も適当な言葉を、その句の中から三字でそのまま書き抜きなさい。

(2) IIに入る最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選びなさい。

- ア 周囲に左右されずに、自らの理想を大切に生きていきたい
- イ 周囲と協調し合いながら、お互いに支え合って生きていきたい
- ウ 周囲の助言を受け入れながら、明るく心静かに生きていきたい
- エ 周囲と競い合いながら、人間的にさらに大きく成長していきたい
- オ 周囲の華やかな雰囲気にならされず、自己を強く主張していきたい

11 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(沖は、魏の太祖の子である。沖が五、六歳であったころ、呉の孫権が、太祖に大きな象を贈ってきた。)

太祖その斤重を知らんと欲し、これを群下に訪ふも、よくその理を出だすなし。沖はいなく、「象を大船の上に置いて、その水痕の至る所を刻み、物をはかってもつてこれに載すれば、則ち校してそれ知るべし。」と。太祖大いに悦び、「即ち施行すべし。」

注1 中国にあった国の名。  
注2 王朝を開いた人。ここでは魏の王、曹操のこと。  
注3 中国にあった国の名。  
注4 呉の王の名。  
「蒙求」より

1 「いはく」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

2 次の文章は、沖の話した内容を説明したものである。I、IIにあてはまる最も適当な言葉を、本文(文語文)中から、Iは二字、IIは六字でそのまま書き抜きなさい。

① 象を載せたIの側面に、水面の位置で印をつけ、象を降ろす。

② つけた印のところまでIが沈むように、IIを載せていく。

③ 象の重さは、載せた物の重さと同じである。

3 「太祖大いに悦び」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選びなさい。

- ア 臣下が、沖の賢さを知る機会となり、これからも忠実に仕えてくれると確信したから。
- イ 幼いわが子が、その場にいる大人の前で堂々と大きな象の重さを量ってみせたから。
- ウ 幼いわが子が、大きな象の重さを量る、大人も考えつかなかった方法を思いついたから。
- エ 太祖自身が、隣国の孫権から立派な象を贈られ、今後の友好関係に期待を抱いたから。
- オ 太祖自身が、孫権から出された難問に答えることができるという自信をもてたから。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(小学生の私は、下校途中、わき道に咲いているつつじの花の美しさを目をとめる。私はその花をつみ取り、それを道に置いて、自宅までの道しるべを作り始める。そこへ自転車に乗った弟の進が現れ、せっかく作った道しるべを踏んでしまふ。腹を立てた私に、花を元通りに直すように命じられた進は、踏みつけた花を自転車のかごに入れて帰宅する。)

「わざとお姉ちゃんが作ったものをこわしたんじゃないわね。意地悪したんじゃないでしょ？」

母は進に聞いた。進は大きくこっくりとうなずいた。

「お姉ちゃんにあやまったの？」

母がぶりをふる。まるで言葉をどこかに置き忘れてきたみたいだ。

「ごめんさい、は？」

母にうながされても、進はむっと押し黙っていた。自分が悪くないと思っ

ている時の進はひどくがんで、だれの言うこともきかない。

「きれいに咲いているお花を、そんなふうにもむしっちゃいけないのよ。わかってるわね。」

母はそれ以上進にかまわず、今度は私に向かって言った。

「うん。」

私はしぶしぶ答える。母が進の味方についているのがわかるので、おもしろくない。

「たくさん取ったの？」

「うん。」

「どのくらいたくさん？」

その質問に答えるのはむずかしかった。気が進まなくもあった。

「百個かな？」

私は首をひねった。

「進の自転車のかごにうんといっぱい。」

「そんなに取ったの？」

母は声をはりあげた。

「だめよ！ そんなに取っちゃダメ！ お花を取ったりしたらいけないの。さあ、もうしないうって約束してちょうだい。」

けっきょく、私が怒られたのだった。これはおもしろくないので、母がいなくなるまで、私は進をいっぱいこづいた。

「明日の朝までに、お花、もどおりにするのよ！ いい？」

「どうやるんだよ。」

「自分で考えるの！」

すると、進は見たことがないほどこわい目をして、私をにらんだ。

その晩は、私が先にお風呂にはいった。進はどうするつもりだろう、と私は考えた。それとも、どうもしないつもりかしら。

私はお風呂が好きで、とても長い時間はいっている。進とつつじの花のことはいつのまにか忘れていると、いきなり浴室のドアが開いた。

進だ。その時、私は薄い水色の湯船につかり、あがる前の「百教え」をやっていた。

「七十七、七十八……なあに？」

いきなり、ふぶきのように、紅色のひらひらがふりかかってきた。一気

にはあつと、私の頭をめぐけて、濃いピンク、淡いピンク、朱色、薄紫、

白のこまかいかけらが落ちてくる。鮮やかな色に飲みこまれて、私は一瞬

息ができなくなる。つつじだ。つつじのふぶき。

進は、砂場用のバケツを空にしてしまおうといかにも気分よさそうに、に

やりとした。私はあつげにとられて弟を見つめた。頭から花びらをすく

って手の平でなげると、つつじはだいたいぶおおざっぱに引きさかれてい

る。それにしても、やわらかい花びらをこれだけちぎるのは、ずいぶん根気の

いる仕事だろう。

ドアのしる音がして、進は姿を消した。私は、湯船に浮かんだこまかい

花びらを、お湯と一緒にじゃぶじゃぶすくった。それはとてもきれいだ

ったが、こわくももあった。花が完全に死んでしまったのがわかるので、こ

わかったのだ。

わき道に咲きこぼれていたつつじ。その枝先の生きている花が頭に浮か

んだ時、私は悪いのは自分であることに気がついた。私がむしりつつ、

私がすて、進がつぶつぶして、進が引きさいた。でも、最初は私だ。

自転車が進道しるべをひいてしまった時のショックが、あまりに大きかつ

たため、進ひとり花をめぐちゃにしたような気持ちになっていた。だ

から、母が進より私を怒るのがゆるせなかったのだ。

生きている花をつんだのは私なのに、それが美しい道しるべであるうち

は、つつじが死んでいることがわからなかった。花が、自転車のかごの中

の黒いかまきりになった時、かすかな悪い予感がめばえた。そして、進が

花を小さなかけらに変える。

自分がとても残酷な気がした。明るい色の小さな花のかけらが、髪

やばだやお湯の上や白いタオルの洗い場の床に散っているのを、きれいだ

だなと思ひ、こわいなと思ひ、胸がどくどくと鳴って苦しかった。「ちよ

っと、いつまではいっているの！」

母が私をひきずりだしにやってきた時、その力強い声に、はっとして目を

をみはった。しかし、母は私よりもっとはっとしたらしく、小さな悲鳴を

あげたのだった。

「まあ……。」

なんとも言いようがない声で、母はうめいた。

「つつじよ。」

私はやっとなをす出すことができた。そして、身の安全のためにつけくわ

えた。

「進がやったのよ。」

母はお湯の中をかきまわしていたが、透明なおかしな形のかげらを、い

くつか手の平にすくあげた。それは、もちろん花びらではなかった。私

はしばらく考えてみた。そして、ようやくその正体がわかった。丸めたセ

ロテープとセメダインのかげらだ。

急にはのぼのとおかしな気がした。進の気持ち、そっくり理解できた。

弟は私に言われたとおり、傷ついた花をもとにもどそうとがんばったのだ。

彼はセロテープとセメダインを使って、破れた花びらをつなぎあわせよう

とした。きつと、さんざん苦労したのだろう。どうにもならなくて、頭に

きて、ついに、花をばらばらにしてしまったのにちがいないのだ。

私はなんだか、ほっとしたように明るい気持ちになって、湯船から、ざ

んぷりとあがった。

(佐藤多佳子「五月の道しるべ」より)

注 首を横にふる。

1 「鮮やかな」「透明」の漢字の読み方、ひらがなで書きなさい。

2 「まるで言葉をどこかに置き忘れてきたみたいだ。」とあるが、この

ときの進はどのように思っているか。私は考えた。最も適当なものを、

次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 進は、母が自分の意見を聞いてはくれないので、母の誤解は解けな

いと思っている。

イ 進は、母に促されても言葉が思いつかないので、私に謝るうにも謝

れないと思っている。

ウ 進は、母が自分の気持ちをわかってくれないので、私に謝る機会を

失ったと思っている。

エ 進は、私に対して悪いことをしたつもりはないので、謝る必要はな

いと思っている。

オ 進は、私が母の言葉に従うようには見えないので、自分から謝ろう

かと思っている。

3 「私は進をめぐらした。」とあるが、私がこのような行動を

とったのはなぜか。四十五字以内で説明しなさい。

4 この文章の表現の特徴を説明したものと最も適当なものを、次の

ア～オの中から一つ選びなさい。

ア 短い文を効果的に重ねていくとともに、対句表現を繰り返しながら

私と弟のそれぞれ的心情の変化を丁寧に描いている。

イ テンポのある会話を多用するとともに、色彩感覚豊かな表現を取り

入れながら私の心情の動きを描いている。

ウ くだけた言葉遣いを会話文にうまく用いるとともに、反復表現を多

く取り入れながら私の性格を印象深く描いている。

エ 会話文に比喩を巧みに取り入れるとともに、イメージ豊かな表現を

繰り返しながら私の心情をありのままに描いている。

オ 倒置の表現により文章のリズムを整え、対比的な言葉

を取り入れながら母と私の性格の違いを描いている。

5 「私はなんだか、ほっとしたように明るい気持ちになって、湯船から、

さんぷりとあがった。」とあるが、このときの私の心情を次のような形

で説明したい。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

湯船の中で、私は進によって引きさかれた花を手にして、生きて

いる花をつんだ自分の行為を振り返り、「I」と自覚する。

また、セロテープとセメダインのかけらを見て、自分の言いつけ

を守り花を元に戻そうとIIに努力した進の思いが十分にわか

る。こうして自分と周囲とをIIIに見つめる心のゆとりを取り

戻した私は、晴れやかな心情になり、勢いよく湯船を出たのである。

(1) Iにあてはまる最も適当な言葉を、本文中から九字でそのま

ま書き抜きなさい。

(2) II、IIIに入る言葉の組み合わせとして最も適当なもの

五 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

われわれは時間や場所についていつもだいたい見当をつけることができます。深い洞窟にもって夜屋の情報を遮断し、時計もなしで自由に暮らすと、だいたい二四時間から二五時間の間くらいのリズムで寝起きするようになる、という実験があります。脳にはおおよそ一日のリズムを測る仕掛けがあるので。普段われわれは、このような内からの仕掛けと周囲からの情報を合わせて、だいたいの時間経過を判断しています。

(第一段落)

自分の居場所を知るのも大切な能力です。アフリカのブッシュマンは獲物を追って時には二日も三日も草原の中を移動することがあるそうだが、ちゃんと自宅へ戻ってきます。別に地図を持っているわけではありません。太陽や星の位置から東西南北を判断し、手掛かりになる地形や樹木などを記憶することで頭の中にしっかり地図を作り上げているのです。

(第二段落)

大きな広がりの中で、正しく見当をつけるということの大切さは、時間や空間に限りません。自分がこれからやらなければならない問題の処理にこそ最もよく表れます。

(第三段落)

たとえば何かの仕事を抱え込んだ時、だいたいこの程度のペースとこの程度の資料を読めばいい、という見当がうまくつけられて、たいしてあせらずに余裕で仕上げるのできる人がいるかと思えば、その仕事にどれくらいエネルギーを注ぎ込めばいいのかまったく見当がつけられずに、というか見当をつけようともせず、こんなものすぐできる、とたかをくくって遊びほうけ、間際になってあせりまくって、結局何もできずに終わってしまう人もいます。試験でも、ここは先生がかなり熱を入れて授業していたな、大事なところと違くない、という見当がつく人と、つかない人がいます。授業の内容だけでなく、その重要さの程度を教師の態度と合わせて、大きな立場から眺められるから、見当がつくのです。

(第四段落)

見当をつけるためには地図が必要です。地図は点ではなく、面からできています。たぐさんの地点がそれぞれに関係を持っているのが地図です。仕事をどのくらいで仕上げるかという見当も、この試験ではどこが重要かという見当も、仕事からむ周辺の知識、あるいはその試験についての授業全体の知識、つまり面の知識が作り上げられていないと、つけようがありません。見当づけはヤマカンとは違います。ヤマカンは面の知識なしで、エイヤツと目的地点に達しようとするわけですから、うまくいくわけがありません。たとえうまくいったとしても、その時かぎりでは何も残りません。

(第五段落)

人生の節目節目で、われわれはいろいろな選択や決断を迫られますが、その決断も複数ある選択肢のどれでもいいや、箸の倒れた方向へ行こう、という選択や決断ではうまくいきません。自分は何をしたいと思っているのか、どの程度のことかと思っているのか、あるいは今選ぼうとしていることが自分の性格に合っているかどうか、その方向を選べばその後の生活はどのような方向へ向かうのか、などということについてあらかじめある程度の考えを持っていないと、見当をつけられません。

(第六段落)

見当をつける、というのは扱っている問題を一度手元から離して、遠い距離から眺め、他の問題とのかかわりがどうなっているのかという大枠を知ることです。全体像をつかむことです。日本には大局観という言葉があります。また、英語から輸入された、日本でも定着していることわざに、「木を見て森を見ず」というのがあります。あるいは「井の中の蛙、大海を知らず」ともいいます。細部にこだわって見当をつけられない愚かな状態のことを笑っているのです。部分的な、狭い知識だけでは全体がどうなっているのかは判断できません。大きな立場から見ると、それまで見えていなかったことが見え、わからないこともわかるようになります。

(第七段落)

(山鳥 重『わかる』とはどういうことか)より

注1 カラハリ砂漠を中心に住む狩猟採集民族。

注2 たいしたことはない、と軽く見て。

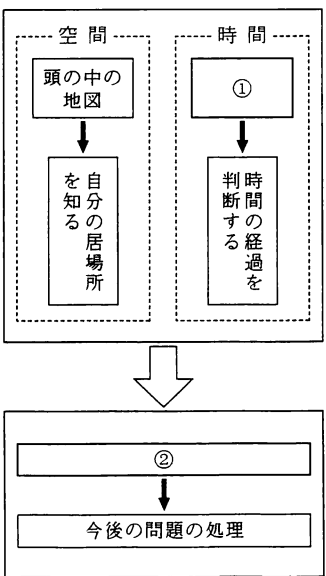
注3 勘に頼って万一の成功を願うこと。

- 「遮断」「愚かな」の漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。
- 第七段落の「輸入され」の「れ」と同じ意味・用法のものを、次のア〜オの中から一つ選びなさい。  
ア 彼女には、安心して仕事を任せられる。  
イ 先輩に助けられて試合に勝った。  
ウ 旅行中のことが思い出される。  
エ 私は、朝の五時には起きられる。  
オ お客様はもう休まりました。

3 次の図は、第一・第二・第三段落の内容をまとめたものである。  
①は十五字、②は十四字でそのまま書き抜きなさい。

第一・第二段落

第三段落



4 「地図は点ではなく、面からできています。」とあるが、これはどのようなことを言っているのか。最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選びなさい。

- 部分的な知識が、抽象的な内容から具体的な内容へと変わることを、部分的な知識が結び付いて、それぞれが新たな意味を持つこと。
  - 部分的な知識が全く意味を持たず、全体としてだけ役に立つこと。
  - 部分的な知識がそれぞれに独立し、それだけで意味を持つこと。
  - 部分的な知識がそれぞれ関連し合い、全体として意味をなすこと。
- 5 第五段落と第六段落はどのような関係にあるか。最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選びなさい。
- 第五段落の内容に対して、第六段落は反論を展開している。
  - 第五段落の内容を離れて、第六段落は話題を転換している。
  - 第五段落の内容に関して、第六段落は問題点を提示している。
  - 第五段落の内容を受けて、第六段落は発展的に説明している。
  - 第五段落の内容に即して、第六段落は引用部分を強調している。

6 筆者が、この文章全体をとおして最も言いたかったことは何か。七十字以内で書きなさい。

六

あなたに「学校新聞」の編集者から次のような依頼がありました。  
「自分の中学校生活を振り返って、下級生へのアドバイスを書いてください。」  
あとの条件にしたがって原稿を書きなさい。

条件

- 二段落構成とすること。
- 前段では、自分の中学校生活を振り返ってよかったことや反省することを具体的に書き、後段では、前段をもとに下級生へのアドバイスを書くこと。
- 全体を百五十文字以上、二百字以内でまとめること。
- 文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。
- 氏名や見出しなどは書かないで、本文から書き始めること。